

DRAMA かながわ 52

神奈川県演劇連盟事務局：横浜市中区福富町西通り52（横浜演劇研究所内）Tel. 045-261-4866



芝居塾・感謝感謝で幕を閉じて…。

まずはこの場をお借りして芝居塾に力を貸してくれた全ての方々に感謝の意を表したい。舞台装置製作のワークショップ開催から実際の立ち上げ・バラシまで尽力を尽くしていただいた青少年センター舞台芸術部舞台技術課の皆さん、広報や稽古場の手配等々に色々配慮していただいた企画課の皆さん、そして演劇連盟加盟劇団の皆さん、本当にありがとうございました。

5月、初顔合わせ。会場に集まった高校生たちは緊張と不安でいっぱい顔をしていた。それはそうだ、『芝居がしたい!』という思いで申し込んだ芝居塾ではあったが、どんな作品を上演するのか、どんな劇団と一緒にこの先を過ごしてゆくのかも分からない。不安なものも当然である。来年度の芝居塾は募集をかける段階で担当劇団と上演作品のアナウンスをしておいた方が親切なのではないかと思う。今はホームページで色んな情報を収集することが出来る。劇団のホームページからその劇団のカラーや過去の作品の劇評まで調べられる場合がある。参加者やその保護者の方々には前もって知っておいてもらう方が不安も少しは解消するのではないだろうか。

とは言うものの不安なのは高校生たちだけではなく劇団側も同

じ、いやそれ以上に深刻である。何しろどんな面々が集まってくるのかは神のみぞ知る。蓋を開けてみなければ分からないという状況だ。前もって応募してくれた人の素性を知る術は無いし前年のデータは参考にしかない。例えば第一回の芝居塾ではそこそこ居たはずの男子の姿は今回の塾生にはおらず、何と参加者13人中12人までは女子。1人だけ参加してくれた男性は男の子どころか人生の大先輩である。こんな事態は予想のしようが無い。担当する劇団にはこういった状況に柔軟に対処してゆく覚悟が必要だ。

さて、お互いを探り探り始めた稽古。まずは以前合同公演でも行った“壁を取り払う”という事から着手する。芝居の稽古というよりはコミュニケーションを深めるための稽古を集中的に行う。互いの素性（劇団員とか高校生とか、年齢とか経験とか）を伏せ、これから一つのものを作ってゆく仲間であるという意識を深めてもらう。手法としては互いを名前で呼び合うことをせず、自分で自分にあだ名をつけてもらい稽古場では敬称をつけずにそのあだ名で呼び合うことにした。実は今でも塾生たちの事を思い出すと本名はパッととは思いつかずあだ名が浮かんでしまう。そして

“達磨さんが転んだ”や“ハンカチ鬼”などゲームを主体にコミュニケーションを図ってゆく。無邪気な高校生と無邪気な大人達は稽古場で本気で遊び、急速にその距離を縮めてゆく。



6月、少しずつ台本を使った稽古を始める。本番用の台本はまだこの段階では脱稿していなかったのだが、今回の作品は以前にも数回上演しており、その際に使用した台本を練習用として使用した。塾生達は膨大な台詞の量に恐れをなしていた。しかもこの作品は一度舞台に出たら場面転換や退場することは終演まで無い。企画課の方々には「高校生にこの量は無理ではないか?」「何とか60分くらいの作品にまとめられないか?」といったご指摘をいただいたが、集まった塾生たちの素養を見て成功の確信を持っていたので、責任持って指導するという事で納得いただく。しかし今回一番のネックになっていたのが稽古時間の問題だ。芝居塾の稽古は基本的に土日の開催だが、劇団員の中には仕事の関係上土日に休めないものも少なくなく、演出家にいたっては土日の休みは皆無という状況だ。苦肉の策として稽古場にビデオカメラを置き、演出は後日そこから得られた情報を元に劇団員に指示を託し劇団員から塾生に指示を出すという方法をとった。これはまるで伝言ゲームのようで正確に指示が伝わるか不安であったが、そこは長い間同じ釜の飯を食い難難辛苦を乗り越えてきた仲である。不安はすぐに解消した。読み稽古は順調に消化されてゆく。

7月、台本も完成し稽古にもいよいよ熱が入る。本作の登場人物は13人だが劇団12人、塾生13人の計25人の出演者がいるため、チームを2つに分けダブルキャストでの公演とした。チーム分けは稽古時間の13時から17時までしかいられない塾生と、夕方以降の稽古にも参加できる塾生とで分けた。ダブルキャストとすることで面子の貸し借りが出来、またG/9流の考え方として台詞は自分の部分だけではなく全部の台詞を覚えるようにと指導をしたので全員が色々な役を経験し、同じ脚本でも演じる人が違うと解釈も変わるという事を経験してもらうことが出来た。塾生たちのみ

ならず劇団員にも良い経験になったようで、塾生たちからは稽古に来るのが楽しみだという嬉しい言葉をいただく。また稽古場にはちょくちょく演劇連盟所属劇団の方々が顔を出しに来てくれて励ましをいただく。

8月、学生たちは夏休みに入り稽古日も土日のみの限定ではなく平日にも開催し稽古のピッチを上げてゆく。台詞をただ読んでいただけだった塾生たちに変化が見え始める。次第に言葉と気持ちが近づいてゆく。台詞を自分の言葉として話せる・聞けるようになり始める。これを掴めるようになるためには時間との戦いだ。本番まで1ヶ月をきっている。一人でも多くの塾生に気付いて欲しい。出演者たちの熱は互いに伝わり刺激し合い戸惑いつつも何かを生み出そうとしていた。そして本番一週間前、理事長が稽古を見学しに来たが「コレで本当に大丈夫なの?」という顔をしながら帰って行った。しかし私はこの一週間前の状態は作品が生まれる前のカオスだという事を知っていたのでこっさりほくそ笑んでしまった。



そしていよいよ本番! 皆さんのお手伝いと塾生たちの頑張りのおかげでとても素敵なセットが出来上がる。塾生達はいつも稽古していた空間が劇空間へと変わった事に感激し目をキラキラさせていた。あるものは子供のようにハシャギ、あるものは感極まって涙を浮かべ、それぞれ本番を待つ心の準備を整えていた。そして本番の幕が開く。それぞれがそれぞれの力を出しきり、1時間50分も出ずっぱりな長い舞台をやり終えた。バラシが終わり劇空間はもとの何も無い空間へと戻る。会場での打ち上げはほぼ全員が泣いていた。しかしそれは皆が一体となってひとつの事をやり遂げた満足の涙だったようだ。

しつこいようですが、手伝ってくれた方々、視きに来て励ましてくれた方々、そして観劇をしに来て下さった方々に感謝感謝です。

(G/9-Project 佐藤典久)

■ ■ ■ ■ ■ 芝居を観る ■ ■ ■ ■ ■

G/9-Project 第2回高校生のための芝居塾

「12の怒れる…」 作・演出/仲尾玲二

8月24日、今回私は一般公募で集まった高校生(芝居塾塾生:以後塾生)を交えてのG/9-Project公演「12人の怒れる…」を観劇に行ってきました。当日は生憎の雨。しかしそれを感じさせない雰囲気。それもそのはず、場内は若いお客様でいっぱいでした。出演者によって、客層というのはやはり変わる物なのだなあ…と改めて実感しながら席へ。

劇の感じとしては、一つの舞台を全く変えることなく、話が進んでいくタイプのもの。最近テレビで放映された映画「キサラギ」に似た感じがしました。一人の人間を「許す」か「裁く」かを任された個性豊かな12人の陪審員。各々が自分の意見をぶつけ合い、じわじわと皆の意見が変わっていく様を、時に面白く、時に激しく演じていて、楽しく観劇する事が出来ました。

ただ、男である私の目から見ると少し女性陣が多すぎたかな?と思いました。女同士の仁義無き戦いが勃発するシーンでは、ピ

2008年8月23・24日

於:県立青少年センター・多目的プラザ

クビクドキドキしながら見ていました(笑)。あとは塾生の方が、自信が無かったのか演技中に間違ったときに素で笑ってしまったり、台詞を忘れて困ってしまったりと、少し舞台の緊張感が足りなかった部分がありました。そのせいか、台詞が解りづらい箇所があった事が少し残念でした…。

色々と偉そうな事を書いてしまいましたが、何よりも塾生の方々が思いっきり楽しそうに演じていたのが印象的でした。私が高校生にこういうプロジェクトがあったら、もっと早くから演劇に携わることが出来たのになあ…と羨ましく思います。この様な若い可能性が世に出る機会を得られるプロジェクトを更に多くする事が、神奈川県演劇界(?)を発展させる事に繋がるのではないのでしょうか? G/9-Projectの方々、色々とお世話になりました。ありがとうございました。[劇評:劇団葡萄座 遠藤敬介]

劇団麦の会 みなと・温泉・笑劇場しりーず☆笑劇の第三弾

「温泉旅館湯けむりの里＜笑門来福＞ ～馬車道より愛をこめての巻～」 作・演出／山口雄大

2008年6月14・15日 於：関内ホール・小ホール



温泉旅館を舞台に従業員、宿泊客のさまざまな人間模様を描いた作品。威勢の良い女将さんと元気な仲居さん達。宿泊客は二組。議員らしい柳沢の家族と、締め切りに追われる脚本家。そこに音信不通だった女将の娘まさみが男を連れて帰ってくる。まさみは男のために家財を換金しようとしたが、男が結婚詐欺師であることを父の亡霊が明らかにする。しかし女将は男の娘に対する正直な気持ちを認め、旅館の一員として迎え入れる。一方で柳沢の娘雪絵の実の母親が隣の瀬戸際屋のオーナー美鈴であることがわかり、女将は真実を明かさぬまま雪絵の息子小太郎を祖母にあたる美鈴に抱かせる。

と、話の流れを文字にしてみるとこれぐらいのことなのだが、

この芝居の本筋はそういうことではない。『お客さんには単純に「楽しんで」頂けたらいいんだ～』（パンフレットより）という意図の芝居だから、そのように見るのが一番いい。難しいことを考えず、役者さんが元気に動き回るのを見て善男善女が舞台客席一体となって笑う空間を共有する。それはそれで芝居の目指す方向として間違っていないと思う。客席の笑い声からも、この努力は実を結んだことがわかる。

みんな楽しければそれでいいじゃない！よく通る声と、場面転換の音楽（ブリッジ）でとにかく観客を迷わせない。「ちょっぴり涙あり！（チラシより）」だが、まさみの彼氏の裏切りも、美鈴と柳沢の過去も触れはしたけど深入りはしない。サスペンスの女王橋田先生はひたすら花瓶以外の凶器を模索する。ある意味とても安心して見ていられる芝居。これこそが老舗温泉旅館のおもてなしの心であり、老舗劇団の定番シリーズとしての手堅さなのかもしれない。

乗り物でまわるテーマパークの和風アトラクション、という感じ。ツッコミを入れるのを楽しみに芝居を見る野暮な人には、あまりおすすめしません。 [劇評：きさく座 久保健司]

劇団葡萄座

「下宿屋♥殺人事件」

～バス・トイレ・キッチン完備 お〇け付き～

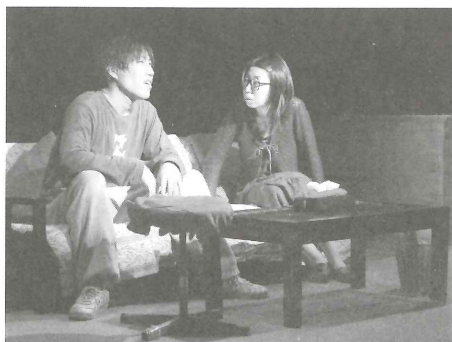
作／一瀬たかね 演出／山本伸二

2008年6月28・29日 於：スペース・オルタ

新横浜の小劇場で葡萄座の舞台を観るのは今回が2回目。地階にある劇場での公演は一段づつ降りて客席に着くまで、どんなドラマが展開されるのか期待しながら別空間に入っていくタノシミを味わせてくれる感じがして私は好きである。知った顔ぶれと挨拶を交わし、パンフレットを見ながら始まるのを待っている時間も実に楽しい。舞台には脚立が……はて？ 仕込みの後片付けが終わっていないわけじゃないし、と思っていると若手の前説が終わって芝居が始った。脚立は道具だった。ボロアパートの1階から穴の空いた2階へ上がるための脚立として俳優がうまく使いこなしている。（この脚立から上には行かないのだが）こんな設定は実に面白い。刑事さん（失礼、警部さんでした）と若い女性のやりとりから、だんだんストーリーがわかってくる。60年の伝統ある葡萄座と認識していたが若い俳優たちで舞台はフレッシュである。下宿屋殺人事件のタイトルが示すように、青年が幽霊で登場。やたら元気のいい幽霊である。チラシがそうであるように喜劇仕立てのこのドラマは、随所で笑いを誘う場面があり結構楽しませてくれる。賞味期限の切れた菓子を食べた死んだという設定に無理がないわけじゃないが、まあ芝居だからいいか。人間の暖かな心が通い合うホノボノとしたドラマは嫌いじゃないが、欲を言えば事件を全て笑いにするより、一人だけでもシリアスな創りにした方が推理劇のリアリティも増したかなあなんて感じました。

お婆ちゃん役の女優さんは面白いキャラで演じていたが、謎めいた人物として出てきたらどんな舞台になっただろう。こんな劇評でいいのかな？

[劇評：]
京浜協同劇団
護柔]



劇団蒼生樹

「パンドラの鐘」

作／野田秀樹 演出／濱田重行

2008年7月4～6日 於：杉田劇場

劇場に入ると緞帳もなく、おもむろに舞台セットが目飛び込んできた。思わず、これから始まる作品への期待でわくわくさせられた。

野田作品独特の、緊張感の後に来るふとした笑い、テンポの良い軽快なセリフが舞台の上で、小気味よく飛び回っていた。スピード感あり、躍動感あり、役者の方々のパワーを感じさせる素晴らしい仕上がりだったのではないだろうか。

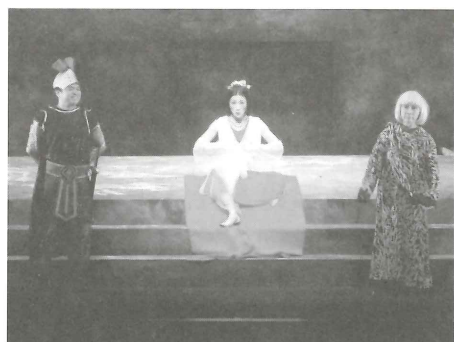
テンポが良いあまりに、所々聞き取りにくいセリフがあったが、そんなものはこの際どうでも良いと思ってしまう程、役者の力強い声量に魅了された。

また、役者の立ち位置一つをとってもバランスが良く、緻密に計算されているような、もの凄く丁寧に演出をなさっているのではないだろうか。役者の方々も、それぞれが丁寧に演じていらっしゃるどころから、この作品に対する情熱が感じ取れる。

クライマックスで、ヒメ女が自らを犠牲にして鐘に入るシーンでは、女王としての凛とした力強さが余計にホロリとさせられるシーンであり、昇天をイメージさせる柔らかな音楽と、幻想的な照明の効果も加わって、思わず心が熱くなった。私、個人的には、もう暫くじっと席に座って、この心地好い感情に浸っていたかったのだが——客電が点くのが早過ぎる……。

ともあれ、素晴らしい芝居を観せて頂きたいという爽快感を胸に、劇場を後にした。

[劇評：劇団「横綱チュチュ」岡崎裕子]



横浜小劇場

「雨の庭」 作／小山祐士 演出／飯田克衛

2008年7月19・20日 於：関内ホール・小ホール

昭和15年に書かれたというこの作品は、今のお芝居とは違った雰囲気を感じていました。

舞台奥に作られた紫陽花がとても印象的で、派手な効果も、激しい動きもなく、その時代を生きた女性達の心情と生活を示した作品で、それ故に、紫陽花の鮮やかさが、とても効果的に出ていたと思います。

かなりの長台詞があり、起きた事、人間関係などのやりとりを全てセリフで説明する手法がとられている為、絵が全く動かないというのが、正直辛いところでした。

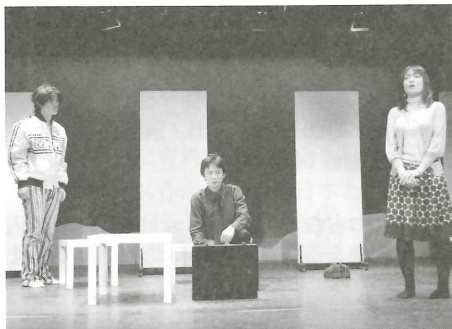
幕開き始まってから、10分以上セリフだけのシーンから始まり、

劇団川崎演劇塾

「黒いスーツのサンタクロース」

作／田窪一世 演出／藤田るみ

2008年7月25～27日 於：横浜相鉄本多劇場



私が「芝居」に望むものはまあ極一般人の人が「みーはー」のごとく役者にほれるのに変わらない。「芝居の登場人物」がいかに私を魅了するか、「擬似恋愛」のようなものである。ただし、それは異性の別なくである。「舞台」という異次元の世

界の登場人物に恋をし、私をわくわくさせてくれればOKなのである。だから正直芝居が終わった後の役者との会話など、私にすれば馬鹿げた事としかいいようがない。もちろん「子供達のお芝居」の後には、激励や、賞賛の言葉をかけてあげるが、本来はそう思っている。

さて、本題に入ろう。「すじがきは無し」と言われているので省略するが、人生に何の希望もなく、自分に背負わされた傷に他人を思いやる余裕もなく生きる売れない女優、そんな女の所に「死神」がやってくる。そして、そんな時にかぎって「舞台の主演」のさそい。「死神」と掛け合って、舞台の終了まで延命してもらう。がしかし、其の役は5年前に彼女自身が途中で投げ出した役なのだ、そして結局5年前と同じく「心の傷」につながる台詞が言えない、「死神」は彼女を励まし、応援する。複線として、彼女の好きな絵本「人魚姫」がでてくる。女は人魚姫の何に共感するのだろう。命をかけて助け、愛した恋人に受け入れられず、泡と消える姿に自分を投影しているのだろうか。この辺で何か違和感を覚えた。複線の「人魚姫」は？ そんな中だんだんと「死神＝黒いスーツの男」は一人の誠実な男性に変貌(私の目に)していく。そう、魅力的な存在になってきたのだ、少し、わくわくする。そんな中、女は絶望し「死」に向かう。彼女が自殺する事を事前に知っていた男は、それを避ける為にやって来たのだ。だが、避けられなかった。5年前の彼女を救わない限り、彼女は救えない。男は自分の声(?)をかけて(人魚姫のように)5年前の絶望にひしがれた彼女に会いに行く。そして、やさしい言葉で彼女を励まし、傷ついた心に小さな光を灯す。そう彼女は救われた。5年後、同じ日常の中で、ほんの少し他人にやさしい彼女がいた。多分もう、「死神」は必要ないだろう。大人のメルヘン。人は誰かに大切にされると、自分の存在を認めることができ、それはまた他人をも認め大切に思えるようになる。極普通のテーマだが、心地よい気分にした。そうだから、役者の生は見えないようにして帰ろう。舞台作りの技術面や構成、役者の技量面等は私如きがどうこう言えないが全体的に広がりのある良い舞台だったと思います。

〔劇評：劇団「ひこぼえ」顧問 儀間鈴江〕



その後も、登場人物が代わっても、結局同じところで盛り込み、セリフだけのシーンが続く。これの繰り返しでは、見ている側からすると、朗読とあまり変わらないのではと感じてしまうのが残念です。

個々のキャラクターは、とても面白くていたと思うので、その辺をもっと動きをつけてみせてもらえたらよかったなと思います。

〔劇評：劇団蒼生樹 三木直史〕

劇団河童座

「銀河鉄道の夜」 原作／宮沢賢治 脚色・演出／横田和弘

2008年8月22～24日 於：相鉄本多劇場

劇団河童座さんの公演を観たのは今回が初めてでした。

初めの方で観客と一緒に、劇中で使うクルミを作ったり、武器を決めるなど、入り込みやすく劇が始まったと思いました。私的には、星座をプロジェクターで映している時に河童座を映していたことがすごくおもしろかったです。このような導入によって、導入部分からすでに楽しめ、すんなりと劇中に入っていくことが出来るのだと実感しました。子供たちも自分の意見が反映されて、どこに自分が作ったくみが出てくるのか、どこに自分が選んだ武器が出てくるのかと、目が離せなかったのではないのでしょうか。

劇中、アンサンブルの方々が主要人物の周りで踊っていたり、ギャグをしていて、話とは別に笑えるところも多々あったので、とても楽しく思いました。駅員さんの動きにもパントマイムのような踊りが入っていて、上手くて驚きました。その動きによって別次元に飛んだのだとわかり、そういう動きによって話を観客に伝えることが出来るのだと感じました。

劇中で主人公たちが会える人はみんなすごく個性的に表現されていて、印象に残る人がとても多かったと思います。そんな人々に出会い、列車の中で同じ時を過ごし、様々な話をして、その人々の優しさや想いを感じて主人公が成長していくという様子が鮮明に描かれていたと思いました。主人公たちが会える人物はみんな普通に列車に乗ってどこかに行くだけなのですが、必ず何か感じさせられるものがあり、一人一人が主人公に影響を与えているのだと感じました。

河童座さんの「銀河鉄道の夜」は、ところどころ笑えるところもあり、最終的には主人公の成長がしっかりと見られる素敵なのだったと思います。〔劇評：風雲かぼちゃの馬車 柴田直子〕



2008年演劇フォーラムの報告

9月7日(日) ——— 於：劇団蒼生樹稽古場

テーマは「神奈川県演劇連盟を考える」

9月7日蒼生樹の稽古場で、8劇団個人会員1名、総勢40人を超える参加者の中で開かれた。

神奈川演劇連盟を考える……のテーマでいつか話し合いの場を持たなくてはとの思いが実現したフォーラムであった。

なぜ、今かと言えば、青少年センターとの関係も増え、県演連の事業が増え始め、近くには県立の新しい創造型の劇場、神奈川芸術劇場も出来る。連盟の仕事は益々増えるかもしれない。神奈川の演劇環境は、横浜市の150年がらみの思惑で、いろいろな動きが出てきているためか、大きく変わり始めているように思われるからである。

県演連は何処へ向かうのかと共に、県演連の存在は？ 価値は？ 認識は？ などを含めての話し合いになった。

まずは、果たして理事会の報告は正確に伝わっているのか……の話から始まり、各個人の連盟の認識の確認から始まった。理事会の決定事項は、おおむね伝わっているとのことであったが、特に若い人たちにとっては、やはり理事会は遠いところとの存在との答えが多かった。印象的だったのは今年加盟した風雲かぼちゃの馬車のメンバーの発言で、連盟にステータスを感じると言った意見であり、逆に古参劇団の若い人に連盟の意識が少ないことだったように思われる。「連盟の存在は、出たときにこんなに大きかったのかとを感じる」という意見に、象徴されるような気がした。

それならば本当に連盟に魅力があるかと言う話へ、つながった。結論としては、青少年センターにおける、資料室・年一回の大ホールの合同公演・多目的プラザ・演博・芝居塾など連盟を支援してくれる存在があること……そして何より連帯としてのつながりなど、価値は認めるとの認識はおおむね一致した。

連盟への高まる期待と現状

この後、今の連盟のあり方とこれからの連盟へと話移ってゆくのだが、ここから意見が分かれ始めた。これから、芸術劇場が誕生するとさらに連盟に期待されることが増えてくる可能性がある。それに対応してゆくのか、行かないのか……。

今でも、連盟の行事が多くついて行けないとの声も少なくなかった。毎年センターの大劇場での合同公演然り、芝居塾・多目的ホール公演粹然り、やっとなんという状況の中これ以上は不可能だと言う意見だ。現状認識から言えばこれは、正論のように聞こえる。

しかし、なら止めるか、権利を放棄するのかの話になると消極的になる。連盟劇団以外から見れば、のどから手が出るほど羨ましい環境なのだから。

現在、劇団が右肩下がりと感じる劇団は？ の問いに、ほとんどの劇団が手を挙げたこと。それなのに、県などからは連盟の評価を高めていると感じる現状がある。これは、最近の連盟の事業を

評価してのことと思われるが、現実のこのギャップがまさに、今の連盟の問題点であるように思われた。

結論的にまとめるならば、今の連盟には芸術劇場への展開はどうか現状ですら答えを出し続けるのは苦しいということになった。

これからの可能性を探る

そこで提案されたのが、連盟の組織の考えを変え、とにかく参加団体を増やし体力を持った連盟にするということだった。この提案にはプロ・アマもない、創る側だけでなく、鑑賞団体など観る側も含め、演劇に関係するもの全てを……というもの。特に反対意見も少なく、特に連盟参加劇団を増やすことには全参加者が前向きな意見であった。

具体的に参加しそうな劇団もあり、例えばかかし座であったりスタジオソルトだったり、個人では地元横浜の住人である劇団離風霊船の大橋泰彦氏だったりの具体的な話も出た。もし、大橋さんが参加するとなれば書き下ろしの合同公演の可能性もあり芸術劇場の？ 落としには説得力のある話になりそうだと話も出た。

話は夢も膨らみ、ポジティブな意見も多かったが、もしこれ以上行事を増やし、逆に連盟が崩壊する可能性もある、新しい劇団が入ってきて連盟がめちゃくちゃになりはしないだろうか……の意見も出た。もし連盟に参加してくる劇団があったら、その辺の調査をしっかりとすべきである……との意見で大勢を占めた。

演博参加者などからも、若い集団を積極的に声をかけ参加劇団を増やし、高校演劇なども含め、連盟を体力のある集団に変えて行こうとの方向性で話は進んだ。

「演劇をやっている人間が前に進まないでどうする」に意見が象徴的であったように思われた。

劇団にとって、魅力のある企画とそうでない企画があり、参加の義務付けはいかなものであるか？ 連盟は必ずしも一枚岩で活動をする必要もない。合同公演を続ける必要があるのか？ 逆にもっと魅力的な合同公演を……との声も出た。ほかに、逆に連盟を去って行った劇団にゆうくりあへの話も出た。

結論を出すための話し合いではなかったので、そのまま飲み会へと移行して行ったのだが、普段連盟を意識していなかった若い人たちの素直な話しも出たし、これからを考える場にもなった。酒の席では、このような場がまた必要だとの意見が多かった。

今回の方向性としては、連盟参加劇団を増やし、体力を持った連盟に……と言うところだろうか。 (理事長 横田和弘)



演劇資料室だより

演劇資料室

「海外秀作演劇ポスター展」終わる

多目的プラザで開催された「海外秀作演劇ポスター展」が9月21日終了。入場者は364名。

このポスター展の開催には県演連と青少年センターの多くのみなさんの協力があって開催することができました。

横浜演劇研究所に保管されていた時のポスターは悲惨な状態でした。保管場所に窮して机の下に丸めて放置され、じゃまにされながら蹴飛ばされることもあり破損したポスターも多数ありました。

芸術作品としても鑑賞できる欧米諸国のポスターを一般に公開して、現代日本の写真が中心の演劇公演ポスターと比較してみるのも面白いのではないかと。ポスター展が企画されました。

これを機会に資料として整備を行うのも目的になりました。

データベース作成のために日本と海外のポスター約400枚を1点毎に撮影する作業を団さんにお願ひしました。

海外のポスターのデータベースと展示用ポスターの説明文を表示するためには作品名、作者名、劇場名を読み取り翻訳する必要がありますが英語以外の6カ国語の翻訳は困難を極めました。



関口素実さんのデザインで華麗なチラシができました。展示用アルミパネルを青少年センターと県演連に購入していただき、特大サイズのパネルはベニヤで森邦夫さんに製作をお願いしました。

ポスターのいたみがはげしくほぼ全てに補修が必要でした。パネルへの飾り付けは一枚ごとにサイズが異なるポスターの実寸をはかりながらパネル中央に貼り付けるのはかなり手間のかかる仕事で山本忠利さんを中心に多くのひとが参加しました。会期に間に合うか心配しつつ山元さんが「この仕事は性に合わないから、いやだ、いやだ……」言いつつ最後までまとめる役を果たしてくれました。

来場者に渡すリーフレットは白幡志穂さんと関口素実さんが深夜までかけて仕上げてくれました。

9月10日会場設営（パネル設置・連結・布掛け等）の仕込みは県演連のみなさんと青少年センターのスタッフの協力（正確にはセンターのスタッフの主導）で進められました。仕込みがウィークデーだったこともあり県演連側のスタッフが少なく青少年センター側に負担をかけてしまいました。

展示されたポスターはどれも見違えるようで芸術作品といったもよいものばかりでした。

多目的プラザでの展示終了後、約15枚のポスターは演劇資料室内の壁面に引続き展示、残るポスターはパネルから引き出しまとめて段ボールケースで資料室内に、アルミパネルはホール舞台奈落にそれぞれ保管されます。（横浜演劇研究所 荒井賢一）

■WEB公開で利用者が増加

演劇資料室の所蔵図書（雑誌を除く）の目録が神奈川県ホームページで公開されました。この結果利用者がより幅広くなり増加しています。

静岡、山梨、埼玉、千葉、東京からの来室が相次いでおります。利用の目的も多岐に亘ります。山梨県北杜市・中学校演劇部の顧問の教師と生徒が一日がかりで上演脚本を求めて来室、夕方まで

かかってやっと演目が決まったと喜んで帰りました。

劇作を目指す人、舞台美術家をめざす高校生など多様な需要にできるかぎりの協力をしております。

「演劇資料室」検索で神奈川県ホームページの「演劇資料室」が表示され、所蔵書目録を検索できます。

■外国名作戯曲の新訳・改訂新版を増やします。

「演劇資料室」には世界の名作戯曲（集）を多数所蔵しております。これらの戯曲（集）の多くはかなりの年代物の本です。大正期から昭和30年代前半に刊行された戯曲（集）は旧字体・旧かな遣いで翻訳文体も現代人の目には古色蒼然たる趣があります。

坪内逍遙訳のシェークスピア全集（沙翁全集）は名訳として名高いのですが逍遙訳で「ハムレット」を通読するにはかなりの努力が必要です。わが国に西欧戯曲が明治20年以降奔流のように紹介されてきましたが作品が英語、ドイツ語、フランス語以外の言語で書かれている場合、多くは原典から直訳ではなくこれらの三カ国語を通して重訳で紹介された例が多くせりふの微妙なニュアンスが欠落した訳もあります。

ノルウェイの作家イブセンやスウェーデンの作家ストリンドベリの作品には重訳で紹介されたものが多数あります。現代では北欧、東欧諸国の演劇研究者により原典より直接訳の戯曲が相次いで刊行されています。

資料室ではご利用者が名作戯曲を楽しみながら読んでいただくために順次新訳・新版の収録につとめます。勿論、古い訳本にも重要な価値があります。明治大正期の訳本と現代訳との対比することでひとつの戯曲がわが国にどのように受容され消化されてきたがわかります。現代人が戯曲に親しめる本を整備してゆくこととともに通常であれば古い過去の本として忘れ去られる運命の図書に光りをあててこれを未来に継承することも演劇資料室の重要なしごとといえるでしょう。

【新規受入の改訳・新訳/改訂本】・・・海外の戯曲

- 「ひばり ジャン・アヌイⅠ」 岩切正一郎訳 ハヤカワ演劇文庫
早川書房2007.09刊
- 「しらみとり夫人・財産没収ほか テネシー・ウィリアムズ」
鳴海四郎・倉橋健訳 ハヤカワ演劇文庫 早川書房 2007.01刊
- 「おかしな二人 ニール・サイモンⅠ」 酒井洋子訳
ハヤカワ演劇文庫 早川書房2006.09刊
- 「サンシャイン・ボーイズ ニール・サイモンⅡ」 酒井洋子訳
ハヤカワ演劇文庫 早川書房2006.09刊
- 「セールスマンの死 アーサー・ミラーⅠ」 倉橋健訳
ハヤカワ演劇文庫 早川書房2006.00刊
- 「鎖を解かれたプロメテウス」 シェリー作 石川重俊訳 2003.10改版
- 「肝っ玉おっ母とその子どもたち」 プレヒト作 岩淵達治訳
岩波文庫 岩波書店2005.04刊
- 「オルメードの騎士」 ロペ・デ・ベガ作 長南実訳 岩波文庫
岩波書店2007.08新刊
- 「夜の来訪者」 プリーストリー作 安藤貞雄訳 岩波文庫
岩波書店2007.02新刊

- 「ヴォイツェク・ダントンの死・レンツ」 ビューヒナー作
岩淵達治訳 岩波文庫 岩波書店2006.00刊
- 「青い鳥」 メーテルリンク作 末松永海子訳 岩波少年文庫
岩波書店2004.12刊
- 「ワーニャ伯父さん ベスト・オブ・チェーホフ」 白水Uブックス
アントン・チェーホフ作 小田島雄志訳 白水社1999.00刊
- 「かもめ ベスト・オブ・チェーホフ」 白水Uブックス
アントン・チェーホフ作 小田島雄志訳 白水社1998.12刊
- 「恋の火遊び・令嬢ジュリー」 ストリンドベリ作 内田富雄訳
中央公論事業出版2005.01刊
- 「死の舞踏」 ストリンドベリ作 毛利三弥訳 オンデマンド出版
＜リキエスタ＞の会2001.04刊
- 「債鬼 他四篇 昭和初期世界名作翻訳全集21」 ストリンドベリ作
森鷗外訳 復刻版 ゆまに書房2004.05復刻
- 「素晴らしい靴屋の女房 ロルカ名作戯曲選」
フェデリコ・ガルシア・ロルカ作 小海永二訳
竹内書店新社 1997.04刊
（表題作のほか「血の婚礼」「老嬢ドニャ・ロシータまたは花の言葉」の二編を収録）
- 「ゲーテ全集3（戯曲）ファウスト」 ゲーテ作 山下肇訳
潮出版社2003.05新装普及版
- 「ゲーテ全集4（戯曲）ゲッツ・フォンベルリヒンゲン」 ゲーテ作
中田美喜訳 潮出版社 2003.10新装普及版
- 「ゲーテ全集5（戯曲）タウリスのイフィゲーニエ」 ゲーテ作
辻訳 潮出版社2003.10新装普及版
（ゲーテの戯曲は上記の3冊でほぼすべてを収録）
- 「イブセン戯曲選集 現代劇全作品」 イブセン作 毛利三弥訳
東海大学出版会1997.11刊
（イブセンの戯曲のうち主要な11作品を収録）
- 「チャベック戯曲全集」 チャベック作 田才益夫訳 八月社2006.11刊
（チャベック兄妹（カレル/ヨゼフ）共作3編、カレル・チャベック単独作5編を収録。チャベック戯曲の全貌を伝える）
- 「ピランデッロ戯曲集1～2」 ルイージ・ピランデッロ作
白沢貞雄訳 新水社2000.02-4刊
（ピランデッロ戯曲の全貌を伝える2冊 8作品収録）
- 「プレヒト戯曲選集1～8・別巻」 ベルトルト・プレヒト作
岩淵達治訳 未来社1998.03・2001.01刊
（プレヒトの全戯曲の最新訳 岩淵達治、畢生の個人全訳）
- 「マリヴォー戯曲選集」 マリヴォー作 佐藤実枝編訳
早稲田大学出版部2006.10刊
（マリヴォーの代表作6作品と訳者の「マリヴォー劇への招待」を収録）

（演劇資料室 荒井）



今年も熱く 県フェス開催！

全11公演スケジュール

- 9月28日 劇団ささく座「身勝手な……姫」作・演出/樋口晶子 於：平塚市中央公民館大ホール
- 10月3～5日 【2008年秋★多目的プラザ連続公演】
風雲かぼちゃの馬車「灼熱の火消し Legend」作/南瓜良成 演出/土井宏晃 於：青少年センター・多目的プラザ
- 10月25～26日 【2008年秋★多目的プラザ連続公演】
劇団麦の会「お勝手の姫」作/小川未玲 於：青少年センター・多目的プラザ
- 10月25～26日 劇団こゆるぎ座「相州鍔絵伝『龍』」作・演出/野村信太郎 於：小田原市民会館大ホール
- 11月8～9日 劇団蒼い群「光る時間」作/渡辺えり子 演出/福本幸男 於：横須賀市立青少年会館
- 11月19日 G/9-Project「あたりが絶妙なπ」 演出/仲尾玲二 於：シルクロード舞踏館
- 11月22～23日 劇団「横綱チュチュ」「さくなむさ・さむなくさ」作/菱倉あゆみ 演出/団のぼる 於：杉田劇場
- 11月22～23日 【2008年秋★多目的プラザ連続公演】
劇団ひこばえ「フラワー」（ミュージカル）原作/アルゴミュージカル 於：青少年センター・多目的プラザ
- 12月13～14日 【2008年秋★多目的プラザ連続公演】
劇団河童座「薮の中」原作/芥川龍之介 脚色・演出/横田和弘 於：青少年センター・多目的プラザ
- 12月13～14日 劇団葡萄座「べっかんこ鬼」作/さねとうあきら 演出/山本伸二 於：テアトルフォンテ
- 12月19～21日 【第6回神奈川県演劇連盟合同公演】
劇団かに座「喜劇・極楽ホームへいらっしやい」作/池田政之 演出/田辺晴通 於：青少年センター・ホール

編集後記

今回のドラマ神奈川も、テーマごとに原稿依頼をして、協力してくださる方のお力でできあがりました。原稿担当のみなさまには、締切に追われ、再三の督促に答えてくださってありがとうございます。感謝しております。

私がドラマ神奈川を編集するようになり、1年がたちました。神奈川県演劇連盟の現状は、演劇博覧会、劇団の公演、合同公演、各施設との連携、行政との関係など他にも山のようにあり「ドラマ神奈川」に掲載するには、紙面が足りないと感じております。

一度掲載しても、そのテーマを持続できないまま、次の号では、新たな事業を掲載するといった、簡潔した記事になっていると思います。

もっと、「ドラマ神奈川」のもつカラーはなに？ とつきつめられたらと感じます。読み手の求める「紙面」はどんな形なのでしょう？ ドラマ神奈川にご意見、ご感想がありましたら、ご連絡いただけるとありがたいです。

（編集：安次嶺里絵子）

神奈川県演劇連盟加盟劇団の記録 (50音順)

● 京浜協同劇団 ● 劇団蒼生樹 ● 劇団蒼い群 ● 劇団河童座 ● 劇団かに座 ● 劇団川崎演劇塾 ● 劇団ささく座 ● 劇団こゆるぎ座 ● 劇団ひこばえ ● 劇団葡萄座 ● 劇団麦の会 ● 劇団横綱チュチュ ● 横浜小劇場 ● 風雲かぼちゃの馬車 ● ラ・テラ ● G/9-Project

神奈川県演劇連盟HP：<http://kenenren.web.infoseek.co.jp/2003/> 演劇資料室HP：<http://kenenren.web.infoseek.co.jp/shiryoushitsu/>

DRAMA かながわ〔第52号〕 発行日：2008年10月1日 発行：神奈川県演劇連盟 編集：安次嶺里絵子（劇団横綱チュチュ）